

令和7年度第2回千葉県立中央博物館リニューアル検討懇談会 議事録

- 1 日 時 令和8年2月9日（月）午前10時～午後0時30分
- 2 会 場 千葉県立中央博物館 会議室
- 3 出席者 委員 阿児委員、稲庭委員、栗原委員、駒見委員、日高委員、
染川委員（オンライン参加）
千葉県庁環境生活部 板倉スポーツ・文化局長、山本次長
山口副参事兼学芸振興室長、小野主幹、
宮川副主査、鈴木技師
現代産業科学館 松田館長
関宿城博物館 押田庶務課長（オンライン参加）
中央博物館 四柳館長、田中副館長、半澤副館長、伊左治事業部長、
猪野企画調整課長

4 内 容

●当会議の進行について

●議 題

- (1) 千葉県立中央博物館実施計画に基づく外部評価について
- (2) 千葉県立中央博物館実施計画に基づく各ポリシー案について
- (3) リニューアルに向けた施設整備の基本方針案について

5 委員の交代について

【小野主幹】

当懇談会において、令和5年11月の発足時より、収集保管分野の委員として御助言をいただいております瀬能委員から一身上の都合により委員辞任のお申し出があり、今回より国立民族学博物館の日高教授に新たに委員に御就任いただきました。日高委員は、保存科学・保存修復の第一人者であり、民俗学の御専門でもあります。日高委員には、御専門のお立場から忌憚なき御意見をいただければ幸いです。

6 当会議の進行について

【小野主幹】

千葉県立中央博物館リニューアル検討懇談会設置要領第4条第2項の規定により、座長が会議の議長を務めることとなっているが、林座長が御欠席のため、千葉県立中央博物館リニューアル検討懇談会設置要領第4条第3項の規定により、職務代理の駒見委員に座長をお願いしたい。なお、今回は会議直前に急遽座長が御欠席となり、林座長から同じ所属の栗原委員に本会議に関するお話があったと伺っている。

【駒見職務代理】

職務代理だが、事務局から説明のあったとおり、今回の会議については、栗原委員に会議の進行をお願いしたい。

【栗原委員】

イレギュラーな形ではあるが、林座長から話も聞いているので、進行をお引き受けする。

7 議 事

【説明 1】 千葉県立中央博物館実施計画に基づく外部評価について

説明概要：

【山口室長】

第1回会議で様式の説明をしたが、自己点検票の実施内容と実績が最終的に公表する評価総括票でカバーされていないなど不備があることが判明した。そのため、自己点検票と評価総括票を1つにまとめた外部評価票において評価を行い、結果を公表することとしたい。

スケジュールについてだが、対象年度の翌年度に評価を行い、翌々年度の予算要求に活かしたい。評価期間が短いため、4月から12月までの実績を事前報告し、意見交換いただいた上で、最終的な実績評価は翌年度の4月上旬までに有識者にお示しする予定である。その他に、翌年度いっぱいかけて評価を行うスケジュールも考えられるが、中央博物館は短いスケジュールで実施したいと考えている。

【四柳館長】

令和7年度4月から12月までの自己点検結果の概要を説明する。1年の4分の3の期間にあたるため、75%に近い数字であれば目標どおり進捗しているという認識である。多くの項目で概ね目標を達成しつつある。

総合目標の入館者数については、本館は順調に推移しており、海の博物館はすでに目標を達成している。海の博物館は猛暑日のない涼しい町勝浦という評判と、博物館に隣接する勝浦海中公園という観光施設からの入込の影響と判断している。一方、海の博物館のWebアクセス数は伸び悩み悩んでおり、この理由の検証等が必要と考える。

重点事業1については、特別展「房総うみの幸大百科」やマリンサイエンスギャラリー「うみ鳥っぷ2」を開催した。関連イベントとして、海に関連する講座や観察会見学会等を着実に実施しており、目標を大幅に上回った。他にも重点研究「東京湾の変遷を探る」や国立歴史民俗博物館との共同研究「千葉の海藻文化と東アジア」も進めている。

重点事業2については、アンケート集計中およびこれから実施予定のもののため、2項目の実績値が入っていない。そのほか、韓国の木浦大学、イタリアのモンタルバーノ博物館、ドイツのベルリン自然史博物館やフランス国立自然史博物館との連携事業も実施した。

重点事業3については、フィールドミュージアム事業の継続実施、博物館のある青葉の森公園で開催された青葉まつりへの出店、隣接する芸術文化ホールでの巡回展示や中央図書館と連携した講演会等を実施した。そのほか共同研究等も推進している。達成度が大きな数字となっており、目標値の設定の見直しが必要かもしれない。

重点事業4については、博物館情報システムの更新によりデジタルミュージアムのアクセス数がトップページの集計から各コンテンツへのアクセス数の集計へ変更されたため、実績値等を現在確認中である。SNS等による研究成果の発信数が目標値を大きく下回っ

ているため、今後より積極的な発信に力を入れて目標達成を目指していきたい。

重点事業5については、資料データベースへの登録は概ね目標達成しており、大利根分館 大多喜城分館からの本館への資料集約も順調に進んでいる。ただ、資料集約の過程で虫害の痕跡が確認されたため、収蔵資料の点検を実施し、被害の実態把握に努めて速やかに隔離燻蒸清掃等を実施するなどの対応を行った。

基盤事業については、レファレンスサービスを除く4つの指標で目標値を下回っている。これに対する対応の検討が必要と考える。

最後に、各館共通の県立博物館各館共通の自己点検表についても説明する。第1回の会議で運営体制についても追加した方がよいと御指摘をいただいたので、項目のXに運営体制という項目を追加した。

委員からの意見

【日高委員】

そもその前提をお伺いしたい。千葉県はこれまで県内各所に設置した県立博物館がその地域にある市町村立館と連携をした活動を行い、その成果を中央博物館が取りまとめる形で千葉県全体を網羅するという分散型の博物館配置を行ってきた経緯があり、地方博物館の先進モデル（千葉県方式）として紹介されてきた。すでに館山や上総にあった博物館は市町村に移譲しており、他の館も集約の方向のようだが、この千葉県方式のレガシーが事業の中でどのように引き継がれているのか。それとも千葉県方式はなくなってしまったのか。

他機関との連携強化というところに千葉の自然、歴史、文化に関する市町村立博物館職員等との共同研究等の実施とあるが、具体的な実績が見えないので補足してほしい。

【山口室長】

公の施設の見直し方針を受けて令和2年9月に千葉県博物館の在り方を策定し、中央博物館を機能強化していく代わりにいくつかの地方にある館を地元市町村への移譲を検討することとなった。移譲検討中の館の要素は中央博物館に集約して、千葉県全体の博物館としてやっていく方向である。県がやるべきものは中央博物館に集約し、地域でやっていただけのものは地域にお願いしていくような方向性。

【四柳館長】

県立博物館が各地にあるという千葉県方式は解消されつつあるが、リニューアルを考えると上では中央博物館に他の県立館の内容を集約して県全体のことを示していく方針である。

【栗原委員（進行）】

かつての千葉県方式は財政的事情等により厳しくなってきた、むしろ地方分権という観点で各自自治体に移譲してやっているということではないだろうか。ちょうど博物館研究2月号（Vo1. 61 No2(No. 693)2026年）で島立資料管理課長がネットワークについて書かれていたと思うので、それを読むといい。

【阿児委員】

評価の公表用資料が1つにまとめたのはとても良い。ただ、内部の人でないと想像が付きにくい事業も少なくないので、パンフレットや展示で作ったリーフレットといった既存のものを参考資料として一緒につけてほしい。

【山口室長】

報道向けに発表した資料等もあるので、参考資料をつけるようにしたい。

【駒見委員】

他機関との連携強化に様々な主体との連携とあるが、具体的なことが分からない。

【四柳館長】

市町村を中心とする地域を対象とした取組みを行っている。3月末の最終的な自己点検時には具体的な表記を加えていきたい。

【稲庭委員】

他機関との連携強化の評価指標について、博物館や研究機関等との連携強化の指標のみが人数でその他は件数となっているが、件数で揃えるべきではないか。もし、スタンプラリーの参加人数を指標とするなら、それは教育普及の方でカウントした方がよい。

また、県立博物館共通の自己点検の運営体制に職員向けDX研修会の開催とあるが、改正博物館法では様々な研修を実施して職員も参加するようにという内容となっているので、DXだけに限定するのではなく、合理的配慮の対応など様々な研修を対象にした方がよい。

【四柳館長】

検討する。

【栗原委員（進行）】

久しぶりの外部評価ということだが、この評価項目を今後見直すことはないか。

【山口室長】

基本的には前年度協議して策定した実施計画の評価項目をそのまま拾っているので、実施計画の最終年度である令和10年度まではこの項目でいきたいと考えている。

【栗原委員（進行）】

中央博物館では、基本的に評定判定するのは数値目標に基づいた達成度で、有識者による評価は文章というやり方だそうだが、最近は数値的目標だけでなく、数値では図れない部分も踏まえて総合評価するところが増えてきている。そういったことも今後考えた方がよいと思うので、今後の課題として検討してほしい。

【栗原委員（進行）】

スケジュールについては、年度末までに取りまとめる短期間案だが、場合によっては1年

じっくり考えるという案も示された。短期間の案でも遅いぐらいと思うが、どうか。

【委員】

意見なし。

【栗原委員（進行）】

それでは、事務局の説明とおりの短期間案で進めていただくということをお願いしたい。

【説明 2】千葉県立中央博物館実施計画に基づく各ポリシー案について

説明概要：

【四柳館長】

博物館事業である資料収集保管、調査研究、展示教育普及に対応して、それぞれコレクションポリシー、研究活動の基本方針、教育普及活動方針を定める予定。また、教育普及方針に紐づくものとしてデジタルデータ公開方針も策定する。

コレクションポリシーについては、千葉の県立博物館である以上、千葉県に関連する資料を中心に収集するが、世界的な研究等を推進するために必要な比較資料も全国・全世界から収集できるような書きぶりとした。研究活動の基本方針については、国際的視野での科学的研究を前面に出した。教育普及活動方針は千葉県立中央博物館みらい計画の「5つのつなげる」を各項目として取り上げた。デジタルデータ公開方針はどのような形でデジタルデータを公開していくかを分野ごとにまとめた。

委員意見：

【栗原委員（進行）】

ポリシーを定めるのは大事なことである。

○コレクションポリシーについて

【栗原委員（進行）】

奈良県では収蔵庫不足による資料廃棄といったことがかなり大問題となっており、国際的にも収蔵庫の委員会が立ち上がるなど、世界的にも収蔵庫不足が課題となっているが、コレクションポリシーがないとそういった議論もできない。今回のコレクションポリシーは、学芸員が一緒になって作り上げ、有識者に見せる最初の案ということによいか。

【四柳館長】

そのとおりである。

【栗原委員（進行）】

コレクションポリシーは内部だけではなく、外部も含めて議論をして作っていくレベルのものだと思うが、今回の原案は館内でどのくらい時間をかけて議論したのか。

【四柳館長】

着手開始が今年度当初。館内の資料関係の部署が中心になり、たたき台を作り、館内での意見交換を2～3回行った。

【日高委員】

除籍について、必要な手続きを経た上でとあるが、具体的にどのような手続きを想定しているのか。保管については運用マニュアルを別に定めるとあるが、除籍の方が運用マニュアル的なものをしっかり作っていくべきである。その時々々の学芸員の考え方や一時的な事情で除籍の判断が下されてしまうことにならないか非常に強い懸念を抱く。

【四柳館長】

冒頭に原則という言葉を入れており、基本的に除籍することを前提には考えていない。ただ、劣化や破損等により復旧の見込みがなく、価値がなくなったという状況になった場合に除籍という判断をしなければならない時がくるのではないかとということで、除籍の項目を入れた。現時点では必要な手続きについては具体的にはなっていないが、実際に必要になった場合に個別の要領等を定めようと考えている。

【日高委員】

博物館資料を原則捨てない、除籍しないというのは当たり前のこと。当たり前のことなので除籍のルールなんていないという意見もある中、わざわざ入れるということは一番重たい決断を博物館がするということである。その時々に応じて運用を考えていいレベルの問題ではない。

【栗原委員（進行）】

この件は他県でも同様の議論があり、除籍という言葉を使うこと自体が問題という意見もある。このような言葉が入っているだけで、除籍することを前提としていると受け取られてしまうので、慎重に考えるべき。

【日高委員】

参考までに、奈良県はマニュアルを作るのに一番時間がかかっている。なかなかまとまらなくて困っているところだが、それくらいのレベルのもの。時間をかけて整備していくべき。

【栗原委員（進行）】

日高委員の指摘どおり、資料保管の運用マニュアルや仮に除籍する場合に必要な手続きについてももっとしっかり議論した上で、このポリシーを定めた方がよい。

【駒見委員】

コレクションをどう運営していくかという部分にも踏み込んでいくべきだと感じる。千葉モデルはなくなったかもしれないが、中央博物館は千葉県の中心であり、他館の手本になっていくものだと思うので、コレクションポリシーではなく、コレクションマネジメントポリシーとして内容を見直すよいのではないか。

【栗原委員（進行）】

他の館もこういったものを作るべきだと思うが、県全体で検討しているか。

【山口室長】

中央博物館と同じく実施計画策定した県立美術館では同様の動きをしている。

【栗原委員（進行）】

現在、国では「博物館の設置及び望ましい基準」を改正しようとしており、昨年末にパブリックコメントが実施された。この基準にも除籍という言葉が入っており、色々な学会が意見を出したところなので、どのような結果になるか見据える必要がある。

中央博物館のコレクションポリシーでは、一次資料、二次資料という言葉を使っているが、「博物館の設置及び望ましい基準」ではこの言葉を使っていない。前回の平成23年の改正時に使うのをやめた。ただ、現場では今でも使っている言葉ではある。この言葉は引き続き使うかどうかも国の動きも参考にした方がよい。

【稲庭委員】

収集・保管の目的は、ほぼミュージアムのミッションとほぼ重なる部分だと思うが、収集資料中心に考えているので、一昔前の項目となっているように感じる。I COMの新しい博物館の定義やそれに伴って改正された博物館法、文化芸術基本法に照らし合わせ、より現代の社会を考えた文言が入れたほうがよい。

【栗原委員（進行）】

I COMの倫理規程にもコレクションポリシーのような内容があり、今年の6月に新しい倫理規程が決まる見込み。国の「博物館の設置及び望ましい基準」やI COMの定義などを踏まえて、内容を再検討すべきだと思うが、今年度中に策定しないといけないものか。

【山口室長】

実施計画では今年度策定することとなっているが、これだけ多くの御意見をいただいている中で、中途半端なものを無理矢理今年度策定するべきではないと考える。

○研究活動の基本方針について

【栗原委員（進行）】

当然のことが書かれていると思うが、意見はあるか。国では研究費も自分で調達するようという方針もあるが、しっかり県で予算をつける体制がある方がよいと思う。

【委員】

意見なし。

○教育普及の基本方針について

【稲庭委員】

5つの項目はすでに設定済のものだと思うが、2026年現在のI COMや諸外国の倫理規程を参照した方がよい。ミュージアムが社会の中でどのように成り立つかということの考え方がここ5年10年でも相当審議され、人々がコレクションやミュージアムの活動に主体的な関わりをもつことやコミュニティへの参加というのが最初に出てくるようになってきているが、中央博物館の原案は研究や物中心の視点が強い。

【染川委員】

稲庭委員の意見に賛同する。稲庭委員から参考になるものなどを数点挙げていただいて

それをもとに書きかえていくのがよいのではないか。

○デジタルデータ公開方針について

【阿児委員】

他の方針に比べて、渋々作ったという印象を受ける。研究活動の基本方針と教育普及活動方針は敬体で書かれているが、デジタルデータ公開方針は常体の文章となっている上、この方針だけ目的すら書かれていない。デジタルデータを公開することで何を指すのか書くべきではないか。中央博物館は、市民研究員制度などもあり、市民科学やオープンサイエンスに取り組んできたと思うので、デジタルデータを公開することで市民科学の発展や成果の普及というところに重きを置いているのではないか。前向きな目的を入れた方がよい。

また、実施計画の何に基づいて公開するのかという姿勢を示すのが方針であり、何をするかという具体的な事項は方針に入れないのではないか。

前文にデジタルアーカイブ化とあるが、博物館法第三条第三項では「博物館資料に係る電磁的記録を作成し、公開すること。」と記述されている。法令等との関係性を踏まえた書き方にした方がよい。

【日高委員】

阿児委員の指摘のとおり、戦略性が見えない。誰に向けて公開するのか。市民が使いやすいものにしたいのか、そうした存在を否定したいのか、来館前の予習に使うか、復習に使うか、など色々あると思うが、そういった意図が見てとれない。中央博物館は、何故デジタル化して公開するのかを整理した方がよい。他の方針も同じである。

また、中央博物館の学芸員は研究者として優秀であり、研究者という側面を持ちながら博物館学芸員として勤めることは重要だが、博物館として社会と繋がるための学芸員の業務というものをもう少し自覚した方がよい。その視点でポリシーも見直した方がよい。

全体的に非常に県民に冷たく、どこを見ているのかわからない印象を受ける。議題1の自己点検でも県民との繋がりをあまり感じられなかった。中央博物館のこれまでの研究機関としての活動は最大の強みだと思うが、それを活かしながらも1つ脱却した形で考えていかないと、せつかくのリニューアルも進化しないまま時代遅れになってしまうと思う。

【栗原委員（進行）】

人文系資料に著作権やプライバシー、人権侵害に関する記載があるが、これは自然史系資料にも言えることであり、全体に関わることはないか。

国際的にも人骨の返還などが大きな話題になっているが、中央博物館でそのような公開できない資料を収蔵しているか。何も書かれていないので、そういった資料は収蔵していないのだと想像するが、もしそのような資料を持っているなら、公開できないものもあることを前提として入れるなど書き方が変わってくる。

【日高委員】

自然史系だとワシントン条約あたりが関係してくると思う。

【四柳館長】

公開できない資料がどの程度収蔵されているか即答できないので、確認して後日お答えさせていただきます。

【稲庭委員】

他の委員からの指摘通り、県民と血が通う関わりという視点が薄いと感じる。各国やICOMの倫理規定で一番重要な1つのキーワードはエンゲージメント。人々とミュージアムの関わりにどう温度をもって血流を巡らせていくかということが中心に語られている。今回示されたデジタルデータ公開方針は、デジタル情報をどのように渡すかしか書かれておらず、その情報が何のためにあるのかがわからない。人々が各々生きることを促進することが求められているので、デジタルデータ公開でどのようにそれを促進していくのかという視点が必要。県民の多くが主体的に中央博物館の資料や展示に関わりをもつのはなかなか難しく、そうでない方がほとんどだと思うが、そこをどうやって信頼関係を作って手を取り合っていくかが大事。こちらから手を伸ばしても断られてしまうようなところを踏み込んでいって、手を取り合っていけるようにしないといけない。エンゲージメントの考え方を目的として明確に設定した方がよい。

【栗原委員】

国立科学博物館は入館者の大半が関東圏。普段から来たくても来ることができない人たちへの対応をデジタル公開も含めて話している。千葉県は広いので、中央博物館に来たくても来られない県民への情報提供という観点で考えるのも大事。デジタルデータ資料の公開、ARやVRの活用も更に進んでいくと思うので、そういった視点でもまた検討いただきたい。

○全体

【染川委員】

自分の専門分野だけでなく、博物館研究系の学会や研究会にも行くよう学芸員に課してはどうか。特にリニューアル検討期間中はそのようにした方がよいと思う。

【栗原委員（進行）】

中央博物館では博物館学グループができたと思うので、そういったグループを中心にどんどん博物館学に関する経験や知識とか集めていくと広がりも出てくるのではないかな。

【四柳館長】

我々に欠けている視点が多くあったと認識した。本日頂いた御意見を参考に検討を進めたい。

【栗原委員（進行）】

今年度中の策定が難しくなって申し訳ないが、全体通じて再検討いただき、次回改めて示してほしい。

【説明 3】 リニューアルに向けた施設整備の基本方針案について

説明概要：

【山口室長】

はじめに、「リニューアルに向けた施設整備の基本方針案について」説明する。

県では県有建物の長寿命化対策を円滑に進めるための「県有施設長寿命化計画」を作っており、中央博物館のリニューアルも基本的にはそこに位置付けられてから先に進んでいくことになる。現在、庁内関係部署と調整中であり、長寿命化計画への位置付けに至っていないため、具体的なスケジュール等も未定だが、可能な範囲でリニューアルに向けた検討を進めていきたい。今回の会議では必要な性能について御意見を頂きたい。

施設整備の基本方針について説明する。中央博物館は県立博物館なので、県有施設として必要な性能を整備することを前提とした上で、博物館として必要な性能もまとめた。設計基準という言葉を使っているが、すぐに基本設計や実施設計に進むための詳細な整理ではなく、大きな方針の整理を行った。

県有施設として必要な性能については、「千葉県県有建物長寿命化計画」や「千葉県県有建物長寿命化計画に係る長寿命化設計基準」からの引用である。博物館特有の性能については、自然系資料及び人文系資料の様々な材質の資料を適切かつ安全に保存しながら、展示や研究等で活用していくための環境を整備することと、重要文化財等の展示にも対応できるよう、公開承認施設の要件を満たした機能及び設備を備えた施設を整備することを目指して、内容を整理した。青いアンダーラインが引いてある箇所は「文化財（美術工芸品）保存施設、保存活用施設設置・管理ハンドブック」や「文化財公開施設の計画に関する指針」からの引用、赤いラインは事務局で追記した内容。最後にあるその他は「千葉県庁のオフィス改革指針」から引用した。

技術の発展スピードが上がっているが、スケジュールが未定のため、実際に設計に向けて動かす際には、もう一度見直していただく可能性もあるが、まずは本案で御意見頂きたい。

【四柳館長】

次に「常設展示計画原案」について説明する。

リニューアルに向けた常設展示のイメージや考え方について、たたき台となるような大枠の案をまとめた。リニューアル後は常設展示のメインとなるストーリー展示や、それに伴う導入展示や体験学習室等を増床部分で展開し、現本館部分ではシンボル展示と探求素材型の展示、見える収蔵庫等を展開したいと考えている。

メインとなるストーリー展示は、誰もがわかりやすく楽しい展示、千葉の魅力が伝わる展示、知の探究・創造へと導く展示をコンセプトとし、自然系と人文系の分野横断型の展示テーマを設定した。時間軸で人文系中心に自然系や分野横断系のキーワードが織り交ざり、現代に至ると空間軸で自然系中心に人文系や分野横断系のキーワードが織り交ざるといった展示構成をイメージしている。ここに示すキーワードは当館学芸系職員に意見聴取を行った上で設定した代表的なものであるが、あくまで大枠の項目であり、今後詳細を詰めていくこととしたい。中央博物館は総合博物館なので、自然系と人文系を組み合わせ、分野横断的に

融合するような展示を目指していきたいと思っている。

現本館部分については、入口付近に視覚に訴えるシンボリックな大型資料を展示して驚きや感動を提供し、誘客のきっかけにしたい。また、個々の知的好奇心に応えるため、収蔵資料を活用した探求素材型の展示、図鑑的な展示を展開するとともに最新の研究成果や情報を発信したい。また、見える収蔵庫を設置し、資料や作業風景等博物館の裏側を気軽に体験できるような施設を設けたい。

委員意見：

○施設整備の基本方針案について

【阿児委員】

県有施設の性能という部分でユニバーサルデザインに触れているが、博物館特有の性能の部分にも必要ではないか。ユニバーサルデザインと一言に言っても、身体的に障害のある方、音に敏感な方、光に敏感な方と様々なので、どのように対応していくか記載した方がよい。また、博物館特有の性能の部分に来館者の安全性という視点を追加すべきである。順番としては、資料の安全、来館者の安全があって、その次が職員の安全ではないか。

【稲庭委員】

基本的な考え方の運営部分に「誰もが使いやすく、楽しめる、県民に開かれた施設とするための配慮」という記述はあるが、これを県有建物もしくは博物館として必要な性能にもきちんと位置付けて具体的に書いた方がよい。空間としては大きく2つあり、1つはアメニティ設備、カームダウンルームや宗教的な祈禱場所、胃ろう等の内部障害に対応できる場所などで、もう1つは自由に生きられる安心安全な交流場所。例えば鳥取県立美術館などには大きな自由なスペースがあり、明確な目的がなくても多くの方がそこに普段から集まってミュージアムという場所に馴染んでいく場所となっている。そうした交流スペースが必要である。

【栗原委員（進行）】

去年の夏の猛暑の影響を受け、国立科学博物館では基本的に館内では飲食禁止だったところ、展示室を出た場所では水分を飲んでもいいとルールを変えたりした。これからこうしたことも増えていくと思うので、来館者の安全についてはしっかり書いて欲しい。

【駒見委員】

利用者目線をもっと明確にした方がいい。「基本的な考え方」に寄せ集めのような形で書かれているが、一本筋を通して多様な県民に開いていくというのが入ってくるとよいと思う。必要な性能の中に、ユニバーサルデザイン指針に基づきとあるが、それを機能性と捉えるから一部の人だけになってしまうのではないか。あらゆる人に開くという方針があって、具体的にはユニバーサルデザインの指針に基づいてやっていくということなら理解できる。

【山口室長】

全般的に来館者目線が不足しており、肝心なところが抜け落ちてるような形になっていた。見直しを図ることとしたい。

【日高委員】

資料保存について、非常に素晴らしいことを盛り込んでいると思うが、これを本当に実現するのであれば保存科学の学芸員が必要。現有の自然史系、人文系の学芸員だけでこれらを全て担うのは業務過多になる上、専門が異なるのであらぬ方向にいつてしまう可能性もある。人事戦略についても検討した上でこういった項目を書かないと整合性が取れない。

また、災害対策といった内容も書いているわりに、展示ケース等に免震という文言が出てこないなど、随所に言葉足らずで整合性が取れていない箇所があると思う。

【栗原委員（進行）】

現在、保存科学専門の学芸員はいるか。人件費に絡むことは難しい部分も多いと思うが、こう書く以上はちゃんとやれるように検討してほしい。

【四柳館長】

現在、保存科学の学芸員はいない。

【山口室長】

収蔵に関しては、収蔵庫不足というところからリニューアルが始まっている面もあるので、そこも引き続き力を入れて検討していきたい。

【染川委員】

これまで他の博物館のリニューアルにも関わってきたが、その際にインクルーシブデザインの指導してもらった方が千葉出身だったりした。この懇談会の委員はそういった知り合いも多いと思うので、紹介してもらって、中央博物館の職員とワークショップするといったことでステップアップしていく方法もあると思う。

【栗原委員（進行）】

新しくできた施設や、近年リニューアルした施設は、そういった要素がたくさん盛り込まれていると思うが、視察などはしているか。

【四柳館長】

御指摘の趣旨そのものが目的ではないが、視察には行っている。

【栗原委員（進行）】

予算取りも検討して、海外に含めてそういった視点で視察に行っていきたい。

【栗原委員（進行）】

SDGs的な視点が入っていないのが気になる。できるだけ新しいものは使わず、造作物などを再利用するという持続可能な取り組みをしている館も美術館を中心に増えている。そういった視点がないように見える。

また、中央博物館は避難場所に指定されているか。されているのであれば、備蓄等についても記載が必要ではないか。

【半澤副館長】

避難場所には指定されていない。

【阿児委員】

夜間開館は考えているか。昼と夜では動線や必要な設備等が変わってくる。夜間だからこその危険もあり、警備の問題等も出てくる。日中だけの想定か、将来的な夜間開館も想定しているのか、そのあたりはどうか。

【山口室長】

現時点では夜間開館を想定していなかった。ただ、常時ではないが、夜間開館をすでに取り入れ始めているので、その視点を入れて見直しをしたい。

【栗原委員（進行）】

国立科学博物館や東京国立博物館でも夜間開館を実施したが、上野公園も暗くて怖いという意見が出た。東京都に言って公園内のライトを上げてもらうなどした。館だけの問題ではないが、アクセスも含めて検討するとよい。

○常設展示計画（原案）について

【染川委員】

ストーリー展示の時間軸に平成が入っていないのはなぜか。平成生まれのお客さんも多いと思うが、平成を入れなくてよいのか。

【四柳館長】

記載漏れのため、追記する。

【稲庭委員】

常に現代を生きる人が展示を見に来る。現代人の視点と展示がうまく繋がる回路を作るのが重要である。そうした時に、現代の視点を常に更新できるよう余白を残しておくことがとても大切である。メディアや人々が扱う情報の形が次々と変わっていく中で魅力をキープするのは難しくなっている。情報を手軽に入手できる時代なので、情報を並べて渡すだけでは届かない。今提示されている案は1980年代ぐらいに考えられてきた従来の展示の形になっている。時間軸と空間軸で構成されているが、人々に関心を持ってもらう動線を作るため、現代の視点や現在の社会との接続をどう見せていくのか、どこに回路を作るのかといった設計についても説明資料を追加して欲しい。

【日高委員】

かつては30年もつ常設展示、最新の成果は特別展や企画展と言われてきたが、今の時代では30年変わらない施設というのは時代の流れに即してない。そうなると、次のリニューアルをどうするのか、全面改修が難しいなら部分改修しながら更新を考えるとといった思想もこの中に入ってくると、それこそ持続可能な常設展示の運営といったものが明確になってくると思う。予算も必要になるし、仮に20年後にリニューアルとなると今回のリニューアル

アル後すぐに次を考えないといけないようなスケジュール感になるが、そうしたところにも対応していかないといけないと思った。

【栗原委員（進行）】

展示を考える際に、海外からの入館者も気にするべき。現在、海外の入館者はどのくらいか。

【四柳館長】

ほとんどいない。

【栗原委員（進行）】

現状、海外からの来館者が少ないので、その辺についてはあまり考えてないということになるのか。成田空港もあるので国際都市千葉みたいなものを少し打ち出してもいいと思うが。

【板倉局長】

念頭には入れており、佐倉にある国立歴史民俗博物館と連携しながら進めてるところ。成田から佐倉に来て、そこから中央博物館にも足を運んでもらいたいと思っている。栗原委員から御指摘頂いた視点を追加していきたい。

【駒見委員】

千葉市で一番多い在住外国人は分かるか。観光客に来てもらうのも大事だが、中央博物館もある意味、地域博物館なので、地域に住んでいる人をいかに集めるかというのも大事。例えば、在住の方がイスラム圏の人が多ければ宗教的な部分に配慮が必要になるなど、どんな方がいるかで考えることも変わると思う。

【栗原委員（進行）】

国では二重価格の導入といった話もあるが、そういったことをしなくても海外の方に来てもらえるよう心がけて欲しい。

【山口室長】

千葉市内ではなく、千葉県内の在留外国人のデータだが、1位が中国、2位がベトナム、3位がフィリピンで、韓国、ネパール、インドネシアなどが続いており、アジア系の方が多いようである。

【栗原委員（進行）】

姉妹交流をしている館はないか。中央博物館としてはなくても、千葉県が姉妹都市交流等をしているところがあるのではないか。それに関する展示を作ってもいいかもしれない。

【稲庭委員】

ミュージアムは共生社会をつくる重要な拠点というのが、ここ10年ほどで定着してきた考え方で、そういう機能が求められている。ミュージアムは資料を通して多角的な視点からものを見るということを推進できる場所なので、いろいろな考えや異なる文化背景の人たちがそこで交流することでそういった効果が生まれる。移民が千葉で暮らすことへの理解を深めるような交流の場になったり、千葉を互いに知っていくような場所にもなることも

ありうる。アート分野では、移民とのアクセスを積極的に開いていくアーティストも存在する。海外では、博物館でもそうしたアーティストや地域の人々と一緒に展示やプログラムを実施している例もある。共生社会に対応していくような視点もあるとよい。

【駒見委員】

導入展示について、映像などをたくさん取り込んだインスタレーショナルな展示というイメージをもったが、1度インスタレーショナルなものを作ってしまうと代えが利かなくなるので、それも踏まえて計画を立てるとよい。

【栗原委員（進行）】

シンボル展示について、変わっていくのもよいが、人々の記憶に残るようなものも欲しい。国立科学博物館はかつてエントランスにアロサウルスがいて、未だに高齢者の方々には入ったところに恐竜があるところと言われる。それだけ印象的だったのだと思う。そういった印象を持ってもらうことも大事なので、印象に残るシンボルを是非検討いただきたい。

【阿児委員】

現本館は、中央博物館の研究員の日々の活動を伝える展示なのではないかと思った。シンボル展示があり、研究員の最新の成果が見えて、その成果に結びつくような現在進行形のものが見える収蔵庫や標本作りの現場ではないかと思うが、その流れが見えづらい。探究素材展示は単に素材を展示するのではなく、研究員が各種資料を探求している面白さを伝え、探究そのものを展示するとよいのではないか。モノよりもヒトにふった視点の方がいいと思う。コンセプトやタイトルを考えるといい。

国内でも海外でも見える収蔵庫は増えているが、収蔵庫の中で何をやっているかわかるというのが大事なこと。収蔵庫に資料がたくさんあるのを見るのが楽しいわけではない。収蔵庫は単に資料が入っている倉庫ではない。

【栗原委員（進行）】

海の博物館で各研究員が何やっているかというのが顔写真付きであったと思うので、そういった顔が見えるような形でやるのは効果的だと思う。国立科学博物館では日頃の研究活動をSNSやYoutubeで発信している。

【染川委員】

福島県立博物館では、展示会社を入れて、多様な利用者がこの展示についてどのように思うか、どうしたら興味持ってもらえるかということをワークショップで探していった。これがとても有効だったので、今日出た様々な課題を解決するためにも、展示会社を入れる際には展示会社主導でワークショップを実施するといった文言を仕様書に入れることなどを、来年度以降検討して欲しい。